

古カトマンズ湖のボーリングコアの花粉分析に基づく中央ヒマラヤの第四紀気候変遷史

Quaternary paleoclimatic history in the Central Himalaya on the basis of palynological study

藤井 理恵[1], 牧 武志[2], 酒井 治孝[3], 桑原 義博[3], 林 辰弥[4], 矢作 亘[5], 酒井 英男[6], 内田 昌男[7]

Rie Fujii[1], Takeshi Maki[2], Harutaka Sakai[3], Yoshihiro Kuwahara[4], Tatsuya Hayashi[5], Wataru Yahagi[6], Hideo Sakai[7], Masao Uchida[8]

[1] 岡理大・総合情報, [2] 九大・院・比較社会文化, [3] 九大・比文・環境変動, [4] 九大・比文・地球自然, [5] 富大・理・地球, [6] 富山大・理・地球科学, [7] 海洋科学技術センター

[1] Okayama Univ. Sci., [2] Social and Cultural, Kyushu Univ, [3] Earth Sci., Kyushu Univ, [4] Dept. Environmental Changes, Fac. Soc. Cult. Stud., Kyushu Univ., [5] Earth Sci., Kyushu Univ, [6] Earth Sci., Toyama Univ, [7] Earth Sci., Toyama Univ., [8] JAMSTEC

インドモンスーンの変遷史とそのヒマラヤ・チベット山塊の上昇との相互関係の解明を目指し、中央ヒマラヤの南斜面に位置するカトマンズ盆地の泥質湖成堆積物の学術ボーリングを実施した。2000年には盆地中央部で全長218mのコア(RBコア)を、2001年には盆地南縁部で全長108mのコア(LDコア)を採取した。また2002年には盆地西部の池Tau Dahaの畔で12.5mのコア(TDコア)を採取した。これらのコアについて岩層層序学的研究を行い、古地磁気測定とAMS14C年代測定を実施した。また第四紀におけるカトマンズ盆地の古植生と古気候、古カトマンズ湖の環境変遷と湖水の性質や水位の変化などを明らかにする目的で、得られたコアの花粉、珪藻、粘土鉱物、粒度等の組成分析と有機・無機化学分析を行っている。本講演ではRBコアについて1mごとに行った花粉分析(本講演では90m以浅の結果を取り扱う。90m以深については牧ほかの要旨を参照)および同コアの最上部30mとTDコアについて行った50cmごとの花粉分析の結果について報告する。また花粉変遷図から得られた古植生・古気候の変遷史と他の環境指標から得られた環境変遷図を比較検討し、中央ヒマラヤ南麓における第四紀のインドモンスーンの消長を議論する。また、TDコアから得られた花粉変遷図をもとに、ヒマラヤ南麓における人類活動の変遷についても言及する。